風曲集　従仙洞被載外題

音曲習道事。凡、五音・四正より、呂律の達声に相応たるべき位に至る稽古の条条は、記すに事多かるべし。

先、暫、初心習道のために於いては、一調・二機・三声口伝ありの入門より、曲声の次第を分別すべき事。音声に、横・主の二あり。呂律に取らば、横は呂、主は律なるべきやらん。調子を含んで音取る機は主なり。さて、声を出してすでに歌ふ所は横たり。「横に謡ひて、主に云納めよ」と云り。然れども、調子の出所主なるがゆへに、声出しの文字は主なるべし。さるほどに、主より横へ謡ひ出して、又主に納まる声流なり。横は出息の扱ひ、主は入息の色どりなるべし。此出入の息づかいによりて、声を助け、曲を色どる音感あるべし。又、文字により、声によりて、出息・入息の故実あるべき事、心得べし。是、音曲の命也。「曲道息地」と云り。

　又、爰に知るべき事あり。人人生得の音声に、横なるもあり、主なるもあり。横・主足りたるをば相音と云。是、吉声なり。よき声をば、声のままに、さし声より甲の物などまで云渡して、さて、下て云流す声がかりを、主の声に、入息の響きに云納むべし。是は、相音・上声にての曲道也。又、生得横の声のみならば、甲の物を、少し主の声がかりに、息を詰めて謡ひ渡すべし。是、相音の曲聞を色どる故実なり。又、主の声のみならば、横の声がかりに、息をゆるゆると出して謡ひ渡すべし。甲は遣る声の位、乙は持つ声の位なり。遣る声は、声出しは横にて、遣り詰むる所、主の正根あり。心得べし。如此、声によりて扱い色どるを、声をよくつかふとは申なり。是、上手の位なるべし。我声の正体をば分別せずして、只声を色どり、曲をなさんは、音曲正路にはあるまじきなり。

　一、文字の正を心得て、声出し・文字頭、又は韻の字の並びに、同正を置くべからず。句がかり・文字移りを、云変へ云変へ色どるべし。仮令、前句の文字頭を尚の声にて云出したらば、後句を角の声にて云次べし。かやうなれば、連句のかかり重聞ならず。又、文字移りの事、前韻の文字去正ならば、次の句上の文字を入正にて色どるべし。四正の内は、いづれへも色どり替ゆべし。是、音曲の感用たり。但、言葉の文字によりて、同正にてなくてはかなわぬ文字移りあるべし。さやうなる所をば、心にて、声がかりを色どり替ゆる也。是を、音曲の心根を持つとは云なり。是らはみな、曲付の博士也。

　又、拍子を、七五七五の句移りに打ちて、詰め開きを心得べし。句により、文字によりて、拍子を詰め開くべき事、師伝の習道也。初心の人、能能相伝あるべし。

　稽古の次第、先、音曲の文字読みを確かに覚ゆる事、次に、曲体を尽くす事、次に文字移りの正を磨く事、次に、拍子の詰め開きを知る事、次に、心根を知る事なり。心根とは、以前申つる、出息・入息を地体として、声を助け、曲を色どりて、不増不減の曲道息地に安位する所なるべし。凡、曲付の条条、別書有。

一、初心の稽古・用心事。声をつかい、音曲をなす事、只、私にて、ひとり謡稽古する共、貴人の御前、晴れの座敷の態に心をなして、これを謡ふべし。身の姿などをも、座断して、調子の音取り、扇拍子までも、まことの広座の出事の身心に定意して、少しも私と存せずして、心中には誓文を誓て、一大事の時節の態にて歌べし。かやうに心得定めぬれば、稽古も正しく、又は、いかなる広座にても、敗亡なく、臆する心なくて、なす態の分際に、僻事あるまじき手立也。

　凡、音曲に、当座当座の時節の相応あるべし。貴人の御前へ召し出だされてなす態は、式式の祝言、序破急の音曲なれば、かねての宛てがひに変るべからず。是、ことに上手の得手に相応する所也。又、それ程の晴れにてもなく、酒宴などにてもあらで、世の常ならん座敷などにては、かならず祝言に限るべからず。安安と、幽玄のかかり・風体にて、即座に似合たる一曲をなすべし。当世の小歌節曲舞などよろしかるべし。かやうなる折節の態を、かねて宛てがひて、歌いの数数を習持して、当座当座に取り宛てがふべし。如此安意するを、稽古の用心とは申也。

　かやうに稽古・習道を尽くし尽くして、以前申つるごとく、いかなる私にても、又は山野・旅路などの音曲をも、貴人の御前の心に安座して、さて、貴所参勤の即座にては、御前とは心にかけずして、只、習得しつる曲心の分力に定意して、万人の見聞も眼はひとりと安全して、一調・二機・三声と歌出すべし。

一、音曲の懸・風体に、両様あり。人の用ゐも品あり。曲を連ね、句を色どりて、有文音感の、聞き所多きを好む人もあり。又、声聞無文にて、さして心耳を動かす曲はなくて、ただ美しく、たぶやかに聞ゆる風体を好むもあり。是は、いづれも勝劣有まじき也。

　さりながら、無文に品あり。無曲・無文に聞えて、声がかりの面白き斗と知る所の、その面白き感とは、曲を尽くし、文正を磨きて後、安き位の妙聞になりかへる劫の感なり。まことに不覚の無文にて、終に曲をも心みず、文正をも習伝せずして、ただ無心の無文ならば、音曲聞き醒めすべし。

先、無文にてしかも面白き位は、上果也。其位とは、如此の稽古の条条を習極め尽くして、四声・呂律の句移り・文字移り、ことごとく覚得して、安き位になりかへりて、その色色は意中の正根に籠りて、さて、聞く所は声がかりの無曲音感のみなる所、是無上也。此位に至る音曲は、有文・無文、いづれへも、心のままに曲体をなすべし。

しかれば、有文・無文に付て、曲聞差別あり。無文の曲の、音声の面白さばかりにて、よくよく聞き尽くす所、感のさほどにもなからんをば、不覚の無文と知るべし。又、無文とは聞きて、音感いや闌けて、しかも面白さ尽きせずば、是、有文を極め過たる無文よと知るべし。是、上果妙声の位也。しかれば、無文音感は、有文ともに籠るがゆへに、是を第一とす。有文の音感は、無得までには極めぬ所の残るがゆへに、第二とする也。「一に他数あり、二に両判なし」と云り。